

I-26

斜板の級数解について

大阪市立大学工学部

正員 小林 治俊

R&Dコンストラクション

正員 石川 一美

1. はじめに

斜板は、橋梁スラブに代表されるように工学的用途に多様に用いられている基本的な構造要素である。しかしながら、その基礎方程式は複雑であり解析的に解くことが難しいとされ、従来差分法を含む種々な近似解法により解が求められており、現在ではもっぱら有限要素法による解析が行われている。斜板は斜角の増大とともに鈍角部での特異性が顕著になるため、それらの数値解にバラツキのあることは良く知られており、このような数値解の精度の確認のための解析解としては、コーナー関数を用いた Morley [1,2] の解および級数解法による Iyengar ら[3]の解が多いようである。特に Morley は鈍角部での曲げモーメントの特異性を示しており、これを表現出来るかどうかは解法のよしあしを判断する一つの基準と言える。ところで斜板の級数解は、1949年 Lardy [4]が初めて単純支持板への適用を示したが、数値解は求めていない。その後級数解は興味の対象になったもののこれを用いた数値計算はほとんど行われず、有限要素に取って代わられたようである。級数解を広範に数値計算したものとしては前述の Iyengar らの研究がある。しかし、Iyengar らは斜角の変化に伴う板中央のたわみ、曲げモーメントを算出しているが、Morleyが示したコーナー部における曲げモーメントの特異性については何等言及していない。

斜板の級数解は無限連立方程式を解くことに帰着されるが、これは現在パソコンで十分可能である。級数解を正確に計算しその収束性や解の性質を確かめ、ベンチマーク・テストに耐え得る厳密解を求めておくことは現在においても意味あることと考えられる。本研究は固定ないしは単純支持菱形板を対象に級数解を用いて、既存の種々な解析解との精度の比較およびモーメントの特異性について検討するものである。

2. 級数解

斜角 ϕ の関数として $c = \cos \phi$, $s = \sin \phi$ と置き、直交座標系での諸式を斜交座標系で表す。たわみ w の基礎式は D , ν , q を板の曲げ剛性、ポアソン比、荷重強度として次のように表される。

$$\frac{\partial^4 w}{\partial x^4} - 4s \frac{\partial^4 w}{\partial x^3 \partial y} + 2(1+2s^2) \frac{\partial^4 w}{\partial x^2 \partial y^2} - 4s \frac{\partial^4 w}{\partial x \partial y^3} + \frac{\partial^4 w}{\partial y^4} = c^4 \frac{q}{D} \quad (1)$$

曲げモーメント、ねじりモーメントは、

$$M_x = -\frac{D}{c^2} \left[(c^2 + \nu s^2) \frac{\partial^2 w}{\partial x^2} - 2\nu s \frac{\partial^2 w}{\partial x \partial y} + \nu \frac{\partial^2 w}{\partial y^2} \right]$$

$$M_y = -\frac{D}{c^2} \left[(\nu c^2 + s^2) \frac{\partial^2 w}{\partial x^2} - 2s \frac{\partial^2 w}{\partial x \partial y} + \frac{\partial^2 w}{\partial y^2} \right] \quad (2)$$

$$M_{xy} = -\frac{D(1-\nu)}{c} \left[\frac{\partial^2 w}{\partial x \partial y} - s \frac{\partial^2 w}{\partial y^2} \right]$$

以下、本文では斜交対称性 $w(a-x, b-y) = w(x, y)$ の場合を取り扱う。

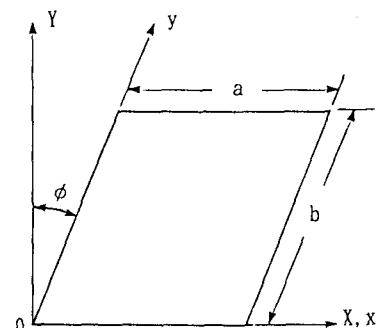


図1. 斜板の座標系

り扱うことにする。そこで、式(1)の特解 w_p と荷重を次の級数で表す。

$$w_p(x, y) = \frac{c^4}{D} \sum_{m=odd}^{\infty} \sum_{n=odd}^{\infty} q_{mn} [\Lambda_{mn} \cos(\alpha_m x) \cos(\beta_n y) + B_{mn} \sin(\alpha_m x) \sin(\beta_n y)] \quad (3)$$

$$q(x, y) = \sum_{m=odd}^{\infty} \sum_{n=odd}^{\infty} q_{mn} \sin(\alpha_m x) \sin(\beta_n y), \quad q_{mn} = \frac{4}{ab} \int_0^a \int_0^b q(x, y) \sin(\alpha_m x) \sin(\beta_n y) dx dy \quad (4)$$

ここで、 $\alpha_m = m\pi/a$, $\beta_n = n\pi/b$, また q_{mn} は式(4.b)より求められる荷重展開係数である。

係数 Λ_{mn} , B_{mn} は式(3), (4)を式(1)へ代入して次のように決まる。

$$\Lambda_{mn} = \frac{-4s \alpha_m \beta_n (\alpha_m^2 + \beta_n^2)}{[(\alpha_m^2 + \beta_n^2)^2 - 4s^2 \alpha_m^2 \beta_n^2]^2}, \quad B_{mn} = \frac{(\alpha_m^2 + \beta_n^2)^2 + 4s^2 \alpha_m^2 \beta_n^2}{[(\alpha_m^2 + \beta_n^2)^2 - 4s^2 \alpha_m^2 \beta_n^2]^2} \quad (5)$$

式(1)の同次解 w_h も斜交対称性を有するものを採用することにし、 $x^* = x - (a/2)$, $y^* = y - (b/2)$ とすれば

$$w_h(x, y) = \sum_{m=odd}^{\infty} \left\{ \begin{array}{l} [\Lambda_m \cosh(\alpha_m cy^*) + B_m y^* \sinh(\alpha_m cy^*)] \cos[\alpha_m(sy^* + x^*)] \\ + [C_m \sinh(\alpha_m cy^*) + D_m y^* \cosh(\alpha_m cy^*)] \sin[\alpha_m(sy^* + x^*)] \end{array} \right. \\ + \sum_{n=odd}^{\infty} \left\{ \begin{array}{l} [E_n \cosh(\beta_n cx^*) + F_n x^* \sinh(\beta_n cx^*)] \cos[\beta_n(sx^* + y^*)] \\ + [G_n \sinh(\beta_n cx^*) + H_n x^* \cosh(\beta_n cx^*)] \sin[\beta_n(sx^* + y^*)] \end{array} \right\} \quad (6)$$

表1. 級数の収束状況（板中央点）

Skew angle ϕ	$m=n$	Clamped rhombic plate			Simply supported rhombic plate		
		w^*	M_1^*	M_2^*	w^*	M_1^*	M_2^*
15°	3	1.1230	2.2797	2.0216	3.6380	4.7970	4.2604
	4	1.1229	2.2798	2.0215	3.6376	4.7972	4.2599
	5	—	—	—	3.6374	—	4.2596
	10	—	—	—	3.6373	—	4.2594
	15	—	—	—	—	—	—
45°	5	0.37700	1.4441	0.97561	1.3176	3.2269	2.1907
	10	0.37687	1.4442	0.97514	1.3172	—	2.1899
	15	0.37686	—	0.97511	1.3172	—	2.1898
	20	—	—	—	1.3172	—	2.1898
	25	—	—	—	1.3171	—	2.1898
	30	—	—	—	—	—	2.1898
	35	—	—	—	—	—	2.1898
	40	—	—	—	—	—	2.1897
	45	—	—	—	—	—	—
75°	5	0.0094436	0.24412	0.11071	0.039313	0.63334	0.28307
	10	0.0093389	0.24322	0.10844	0.039291	0.63277	0.28344
	15	0.0093249	0.24317	0.10807	0.039287	—	0.28338
	20	0.0093208	0.24315	0.10797	0.039285	—	0.28336
	25	0.0093191	0.24314	0.10793	0.039284	—	0.28335
	30	0.0093182	0.24314	0.10791	—	—	0.28335
	35	0.0093177	0.24313	0.10790	—	—	0.28335
	40	0.0093174	—	0.10790	—	—	0.28334
	45	0.0093173	—	0.10789	—	—	—
	50	0.0093171	—	—	—	—	—

次に境界条件は、固定、単純支持条件に対して以下のように規定される。

$$\text{固定: } w = \partial w / \partial x - s \partial w / \partial y = 0, \quad \text{単純支持: } w = \Delta w = 0 \quad (x=0, a) \quad (7)$$

$$\text{固定: } w = \partial w / \partial y - s \partial w / \partial x = 0, \quad \text{単純支持: } w = \Delta w = 0 \quad (y=0, b) \quad (8)$$

たわみ w の一般解は $w = w_p + w_h$ で与えられるので、式(3), (6)をこれらの境界条件式に代入して整理すれば、未定係数 $A_m, B_m, \dots, G_n, H_n$ に関する無限連立方程式を得る。これを $4(m+n)$ 元の連立方程式として m, n を変化させ、級数の収束性を確かめながら解を確定する。なお数値計算に当たっては、式(3)で表される特解の二重級数は単級数に変換し[5]、収束解を用いることが肝要である。

3. 数値計算結果

ここでは等分布荷重 q_0 を受ける菱形板($a=b$)について数値計算を行い、Iyengar ら[3] の級数解を含む他の解析解との比較を行う。なお、ポアソン比は $\nu = 0.3$ とし、級数は $m=n$ として計算した。また、たわみ、モーメントなどは特に断わらない限り、無次元量 w^*, M_1^*, M_2^*, M^* を用いる。

$$w = 10^{-3} \times q_0 a^4 / D \cdot w^*, \quad (M_1, M_2, M) = 10^{-2} \times q_0 a^2 \cdot (M_1^*, M_2^*, M^*)$$

ただし、 M_1, M_2 は主モーメント、 $M = -D \Delta w$ は合モーメントである。

(1) 級数の収束性

斜角 ϕ が $15^\circ, 45^\circ, 75^\circ$ の三ケースについて、板中央点での級数の収束状況を表1に示している。斜角

表2. 固定菱形板の解の比較

Skew angle ϕ	Reference	Values at center			Max. edge moment M^*	Distance from obtuse corner
		w^*	M_1^*	M_2^*		
15°	Present	1.1229	2.2798	2.0215	-4.8516	0.402
	Iyengar et al. [3]	1.1231	2.279	2.021	-4.838	-
	Iyengar et al. [6]	1.1230	2.292	2.033	-4.7488	0.4
	Morley [2] method 1	1.123	2.280	2.021	-4.85	0.40
	Kale et al. [7]	1.1230	-	-	-	-
30°	Present	0.76900	1.9786	1.5440	-4.0541	0.305
	Iyengar et al. [3]	0.7694	1.978	1.544	-4.108	-
	Iyengar et al. [6]	0.7687	1.972	1.544	-4.0024	0.31
	Morley [2] method 1	0.769	1.979	1.544	-4.06	0.31
	method 2	0.770	1.979	1.542	-4.07	0.30
	Kale et al. [7]	0.7693	-	-	-	-
45°	Present	0.37686	1.4442	0.97511	-2.8858	0.215
	Iyengar et al. [3]	0.3769	1.444	0.9750	-2.870	-
	Iyengar et al. [6]	0.3761	1.431	0.9723	-2.9883	0.2
	Morley [2] method 1	0.377	1.444	0.976	-2.98	0.20
	method 2	0.377	1.444	0.976	-2.90	0.21
	Kale et al. [7]	0.3828	-	-	-	-
60°	Present	0.10823	0.80292	0.45389	-1.5859	0.133
	Iyengar et al. [3]	0.1081	0.8028	0.4548	-1.628	-
	Iyengar et al. [6]	0.1073	0.7915	0.4498	-1.783	-
	Kale et al. [7]	0.1219	-	-	-	-
75°	Present	0.0093170	0.24313	0.10789	-0.48282	0.0524
	Iyengar et al. [6]	0.00902	-	-	-	-
	Kale et al. [7]	0.01169	-	-	-	-

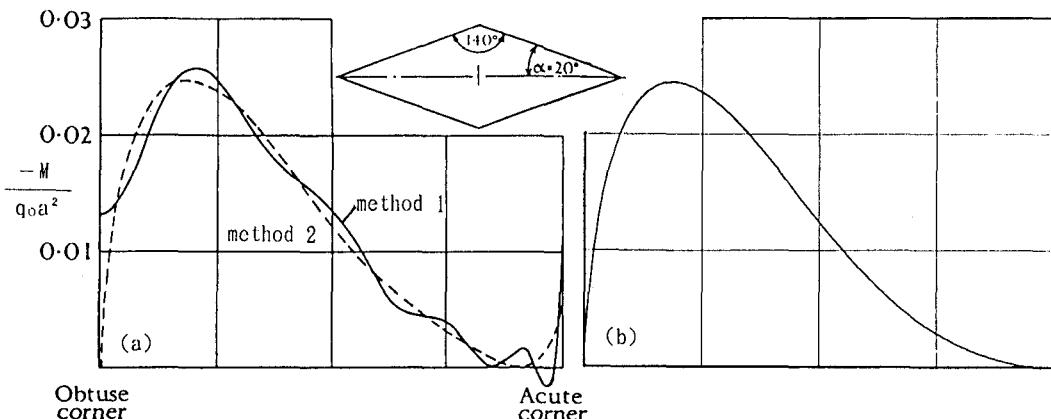


図2. 固定菱形板の固定辺上の合モーメント分布：(a) Morley の解, (b) 本級数解

が増大すれば収束は遅くなり、 $\phi = 15^\circ, 45^\circ$ では固定板の場合が単純支持板の場合よりわずかに収束が速いようである。しかし有効数字3桁程度を得るには、 $m=n=5 \sim 10$ で収束値が得られるものと判断してよい。

(2) 固定菱形板について

表2に他の解析解との比較を示している。これらのうち、Iyengar ら[3]の結果は、本解と同じ級数解で $m=n=6$ とした値である。本解とわずかに違っているが、これは特解を二重級数のまま計算した結果によるものであろう。またIyengar らは文献6で、梁の固有関数（振動モード関数）を用いて周辺条件を満足させ、基礎式に Galerkin 法を適用しているが、斜角が増大すれば精度が悪くなるようである。Morley の値で、method 1 は支配式の合モーメント表現式からの解であり、method 2 はコーナー関数を用いた結果であるが、双方よく一致しており本解とも良好な一致が見られる。最後に Kale らのものは、基礎式(1)の同次式の固有関数と梁の固有関数との組合せによる解であるが、斜角の増大と共に精度が悪くなっている。以上は板中央点での比較である、次に固定辺上の合モーメント分布を検討する。図2は、 $\phi = 50^\circ$ の場合について Morley の結果と本結果を示している。Morley は method 1 に比べて method 2 の方が精度が良いとしているが、どちらの結果にもコーナー部での乱れが見られる。これを除けば、本解と method 2

表3. 単純支持菱形板の解の比較

Skew angle ϕ	Reference	Values at center		
		w^*	M_1^*	M_2^*
10°	Present	3.8691	4.8561	4.4879
	Iyengar et al. [3]	3.875	4.858	4.495
	Morley [1]	3.87	4.86	4.48
	Sampath et al. [8]	3.877	4.858	4.497
	Rajaiah et al. [9]	3.869	4.856	4.488
30°	Present	2.5601	4.2534	3.3291
	Iyengar et al. [3]	2.596	4.283	3.383
	Morley [1]	2.56	4.25	3.33
	Sampath et al. [8]	2.563	4.284	3.342
	Rajaiah et al. [9]	2.560	4.253	3.329
45°	Present	1.3171	3.2269	2.1897
	Iyengar et al. [3]	1.361	3.288	2.282
	Sampath et al. [8]	1.327	3.230	2.210
	Rajaiah et al. [9]	1.317	3.226	2.190
60°	Present	0.40785	1.9062	1.0857
	Morley [1]	0.408	1.91	1.08
	Sampath et al. [8]	0.4114	1.908	1.099
	Rajaiah et al. [9]	0.4077	1.905	1.086
75°	Present	0.039284	0.63277	0.28334

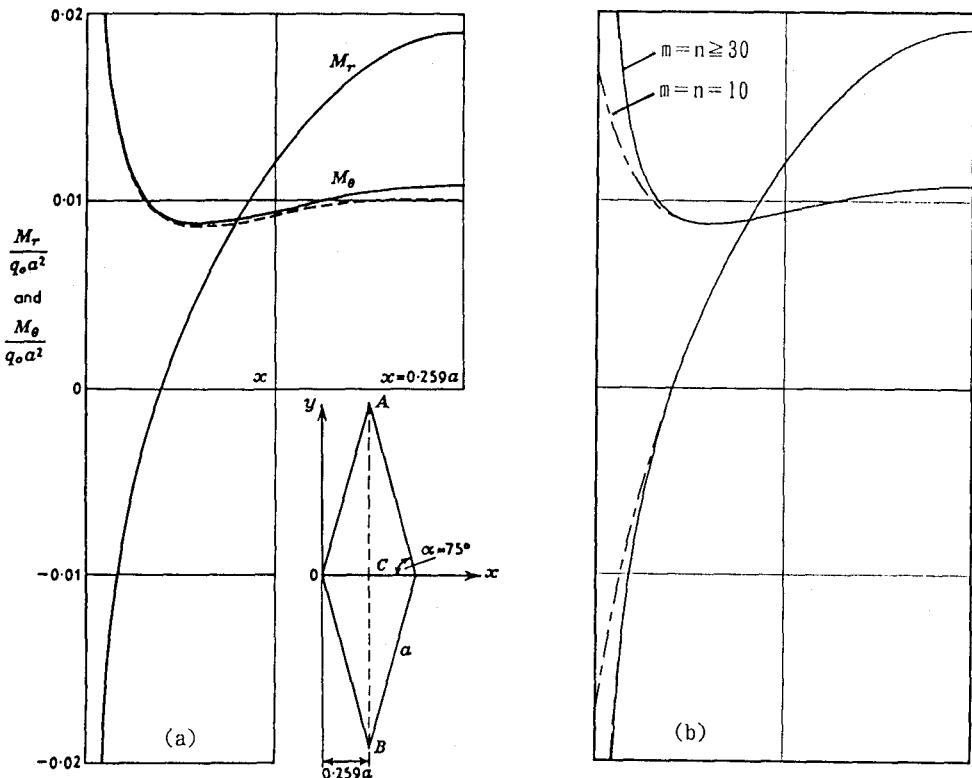


図3. 単純支持菱形板のモーメント分布(OC上)：(a) Morley の解, (b) 本級数解

の結果はよく一致している。岡村ら[10], Warren ら[11]も別解法で合モーメント分布を示しているが、コーナー部を含めて本解と同様な結果を得ている。なおここには示していないが、 $\phi = 30^\circ$ に対する Morley の結果と本解とは鋭角部で違いがある。

(2) 単純支持菱形板について

解の比較を表3に示している。Iyengar らの結果も級数解であるが、本解との違いは固定板の場合と同様に二重級数を使った差であろう。Morley の数値はコーナー関数を用いた結果であり、本解とよく一致している。また Sampath もコーナー関数を用いているが、Morley の結果とはわずかに違いが認められる。Rajaiah らは写像を用いた数値を示しているが、本解と最も良く一致した結果を示している。さて、単純支持板は、鈍角部にモーメントの特異性が生じることが Williams [12] により指摘されている。Morleyによれば、 $\phi = 60^\circ$ の場合、 $q_0 a^2 (1-\nu)(k+1)ka_1(r/a)^{k-1}$ の特異性を持つ。ただし、 $k=0.2$, $a_1 = 3.596 \times 10^{-3}$ 。図3は菱形板の短軸上のモーメント分布である。本級数解は項数の増加と共にその特異性を良く表しており、 $m(n) \geq 30$ では Morley の結果とほとんど一致する。O点での値がどの程度であるか、本級数解による値を表4に示したが、本来この値は無限大となるべきで、本級数解では有限値に留まっている。しかしながら、項数の増加とともに値が増大しており、本解は鈍角

表4. 級数の項数の違いによる
コーナー・モーメント

$m=n$	$M_\theta/q_0 a^2$	$M_r/q_0 a^2$
10	0.0170	-0.0174
20	0.0299	-0.0300
30	0.0414	-0.0415
40	0.0521	-0.0522
50	0.0624	-0.0624
60	0.0722	-0.0722
70	0.0816	-0.0817
80	0.0909	-0.0909
90	0.0998	-0.0999
100	0.1086	-0.1086

部のごく近傍を除いては正しいモーメント分布を示していると推察される。また、 M_a , M_r の値が項数の増大と共に一致していることは、本数値解の正確さを示すものもある。Morley の解は、0点での特異性を有しているので、本解とは逆に鈍角部から遠去かるにつれて、級数の項数を必要とすることも理解される。

1. おわりに

これまでほとんどなされなかった斜板の級数解を検討する目的で、固定および単純支持菱形板に等分布荷重が作用する場合を、既存の級数解を含む解析解との精度の比較を行い、本級数解の正確さを示した。また Morley がコーナー関数を用いて示した鈍角部でのモーメントの集中性についても本級数解で表され得ることが分かった。

参考文献

1. Morley, L. S. D. (1962) Bending of Simply Supported Rhombic Plate under Uniform Normal Loading, *The Quarterly Journal of Mechanics and Applied Mathematics*, Vol. 15, pp. 413-426.
2. Morley, L. S. D. (1964) Bending of Clamped Rectilinear Plates, *The Quarterly Journal of Mechanics and Applied Mathematics*, Vol. 17, pp. 293-317.
3. Iyengar, K. T. Sundra Raja, Srinivasan, R. S. and Sundara Rajan, C. (1971) Some Studies on Skew Plates, *The Aeronautical Journal*, Vol. 75, pp. 130-132.
4. Lardy, P. (1949) Die strenge Lösung des Problems der schiefwinkliger Platte, *Schweizerische Bauzeitung*, Vol. 67, No. 15, pp. 207-209.
5. Krettner, J. (1954) Beitrag zur Berechnung schiefwinkliger Platten, *Ingenieur-Archiv*, Vol. 22, pp. 47-54.
6. Iyengar, K. T. Sundra Raja and Srinivasan, R. S. (1967) Clamped Skew Plate under Uniform Normal Loading, *Journal of the Royal Aeronautical Society*, Vol. 71, pp. 139-140.
7. Kale, C. S., Gopalacharyulu, S. and Ramachandra Rao, B.S. (1972) Analysis of a Clamped Skew Plate under Uniform Loading, *AIAA Journal*, Vol. 10, pp. 695-697.
8. Sampath, S. G. and Rao, A. K. (1966) Some Problems in the Flexure of Thin Rectilinear Plates, Indian Institute of Science, Bangalore, Department of Aeronautical Engineering, Report 112S.
9. Rajaiah, K. and Rao, A. K. (1974) Exact Analysis of Simply Supported Rhombic Plates under Uniform Pressure, *Proceedings of Cambridge Philosophical Society*, Vol. 76, pp. 381-388.
10. 岡村宏一, 石川一美, 古市享 (1993) 曲げ, あるいは面内力を受ける大型の任意4辺形平板要素の剛性方程式, 土木学会論文集, No. 465/I-23, pp. 67-76.
11. Warren, W. E. (1964) Bending of Rhombic Plates, *AIAA Journal*, Vol. 2, pp. 166-168.
12. Williams, M. L. (1952) Surface Stress Singularities Resulting from Various Boundary Conditions in Angular Corners of Plates under Bending, *Proceedings of the First U.S. National Congress of Applied Mechanics*, pp. 325-329.